

10代拒食症女性脳小さく

10代で拒食症になった女性では、欲求などを制御する脳の部位が小さくなることを、福井大の藤沢隆史・特命助教らのチームが画像診断装置を使った研究で突き止めた。「太りたくない」という願望に歯止めをかけられない状態が固定化しているため、精神療法だけではなく、脳に対する治療も必要とみられる。論文は米電子版科学誌「プロスワン」に掲載された。

欲求制御の部位2割弱

拒食症は、極端な食行動を引き起こす精神疾患「摂食障害」の一種で、若い女性に多い。カウンセリングなどの精神療法が行われるが、初診から4〜10年で全快した人は5割に満たないとの報告もあり、治りにくいこ

とで知られる。

チームは、初診で拒食症と診断された12〜17歳の女性20人の脳をMRI（磁気共鳴画像装置）で撮影。食行動に問題のない11〜16歳の女性14人と比べて異状がないか探った。

福井大研究 治療開発に期待

その結果、患者の脳の容積は、瘦せた影響などで全体的に10％程度少なかったが、前頭野にある「下前頭回」だけは減少率が左で平均19・1％、右で同17・6％と突出していた。この部分は、欲求や衝動のコントロール、行動の抑制などを司る。

実際に拒食症にかかっていた期間と下前頭回の容積との関係は、はっきりしていないが、最年長の17歳に近づくと容積が小さくなる傾向も見られたという。

藤沢特命助教は「精神面だけではなく、下前頭回の容積も何らかの方法で戻す必要があるのだろう。今回の成果を基に、有効な治療法が見つかるかもしれない」としている。